



見知らぬものを受け入れない 挑戦する姿勢に変えよう

ITエンジニアが仕事に臨む姿勢や重視するものにも、外国との違いがある。
日本のエンジニアは、あまり挑戦しない、保守的だと見られている。
外国人エンジニアの目に映る、日本のITエンジニア像を聞いた。

「決定に時間がかかる」

Biju Paul 氏

トップテック インフォマーティックス 代表取締役

ある中堅メーカーの開発プロジェクトで、オフショア開発に関するミーティングのためにシステム部門を訪れたときのこと。そのプロジェクトでは基本設計書がスケジュール通りには出来上がらず、遅延のしわ寄せが実装やテスト工程に行くことが分かって、どうにもやるせない気持ちになった。

ミーティングルームは開発現場の一角にあった。壁には、所狭しと未決事項や課題が張り出されていた。その多くは、項目名を「ユーザー」にするか、あるいは「user」にするかといった、誰かが決めさえすれば済むものだった。リーダーに尋ねると「勝手に決めて、何か問題が起こったら困る。だから利用部門に判断を仰いでいるのだが、意見が割れてなかなか決めてもらえない」との答えが返ってきた。

特に慎重な判断が求められる事項においては、全員で議論したり、稟議を回したりするなど、日本のコンセンサス（合意）に基づく決定法は適切なやり方といえるだろう。そこが日本ならではの強みという面がある。

決めるべき人が決めればよい

ただし、マネジャーが1人で判断すれば済むような「単純な決め事」につ

いても、皆で決めることには疑問を感じる。時間の浪費になるからだ。

実際、日本では何事にも時間がかかる。100万円のプロジェクトでも、会議や事前の根回し、稟議などで時間を取られ、「YES」「NO」の判断が出るまでに2~3カ月かかる。インドや米国のユーザー企業なら、せいぜい1~2週間で返事がくる。決めるべき人が、さっさと1人で判断するからである。

インドの習慣はアジャイル的

日本とインドで時間の使い方が違うと感じる場面は、ほかにもある。

日本のエンジニアは、小規模なシステムを開発する際でも上流工程に時間をかける。利用部門にヒアリングして要件を定義し、ドキュメントをきっちり仕上げしてから開発に入る。

インドでは大きく異なる。ミーティングを通じて、こんなものが欲しいとビジネス側に要求されたら、プロトタイプ

を作ることから始める。そして、数日で作ったプロトタイプをベースに足りない機能を追加したり、修正が多い場合には新たに作り直したりする。

インドのエンジニアが、アジャイル開発を学んだわけではない。まず始めて、問題が起こったら対処するというインドの習慣がアジャイル的なので、自然とそうした手法になっている。

準備段階に時間をかける日本のエンジニアと、試行錯誤的に進めるインドのエンジニア。違いを生んでいるのは、文化や社会的背景の相違だろう。何事もきっちりしている日本と、いろいろなものが混ざり合って雑多なインド。

きっちりとしているからこそ、日本のエンジニアは高い品質のシステムを作る。品質へのこだわりはそのままに、時間の浪費を抑えるやり方をうまく身に付けてほしい。（談）

Biju Paul氏。インド出身。インドおよび米国のシステム構築に精通する

